

当院における社会的卵子凍結患者の予後調査と有用性の検討

河合綾子¹、大味由梨佳¹、原口眞帆²、金子拓也³、高橋瞬¹、白倉美怜¹、小柳由利子¹、北野孝満¹、菊地盤¹

1.医療法人社団桐杏会 メディカルパークみとみらい

2.医療法人正育会 春木レディースクリニック

3.医療法人社団春音会 さくら・はるねクリニック



背景

近年、女性の社会進出に伴い卵子凍結が注目されているが、卵子凍結の予後についての報告は少ない。

そこで、当院における卵子凍結患者の予後を調査した。

また、凍結卵子を使用した卵子融解の結果から、卵子凍結の有用性について比較検討した。

対象と方法

【期間】2016年4月～2024年3月(他院からの移送胚を含む) 【検討方法】後方視的検討

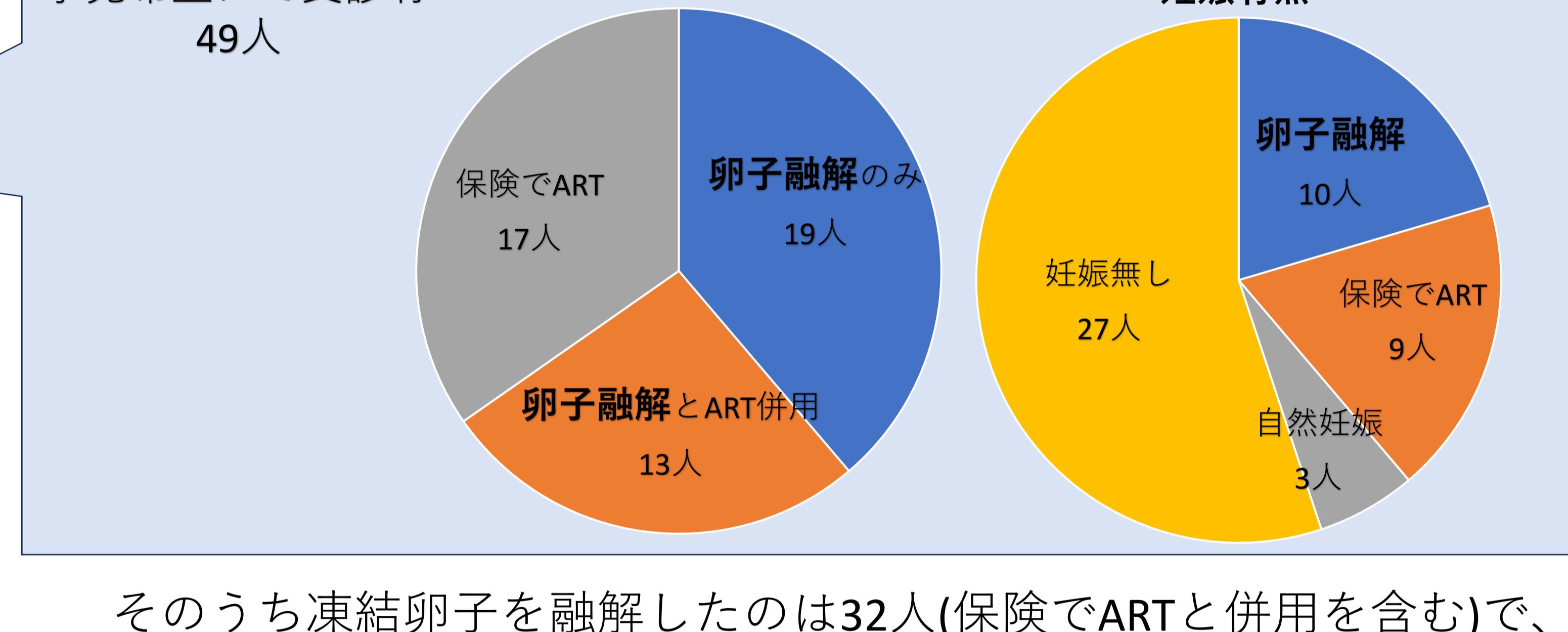
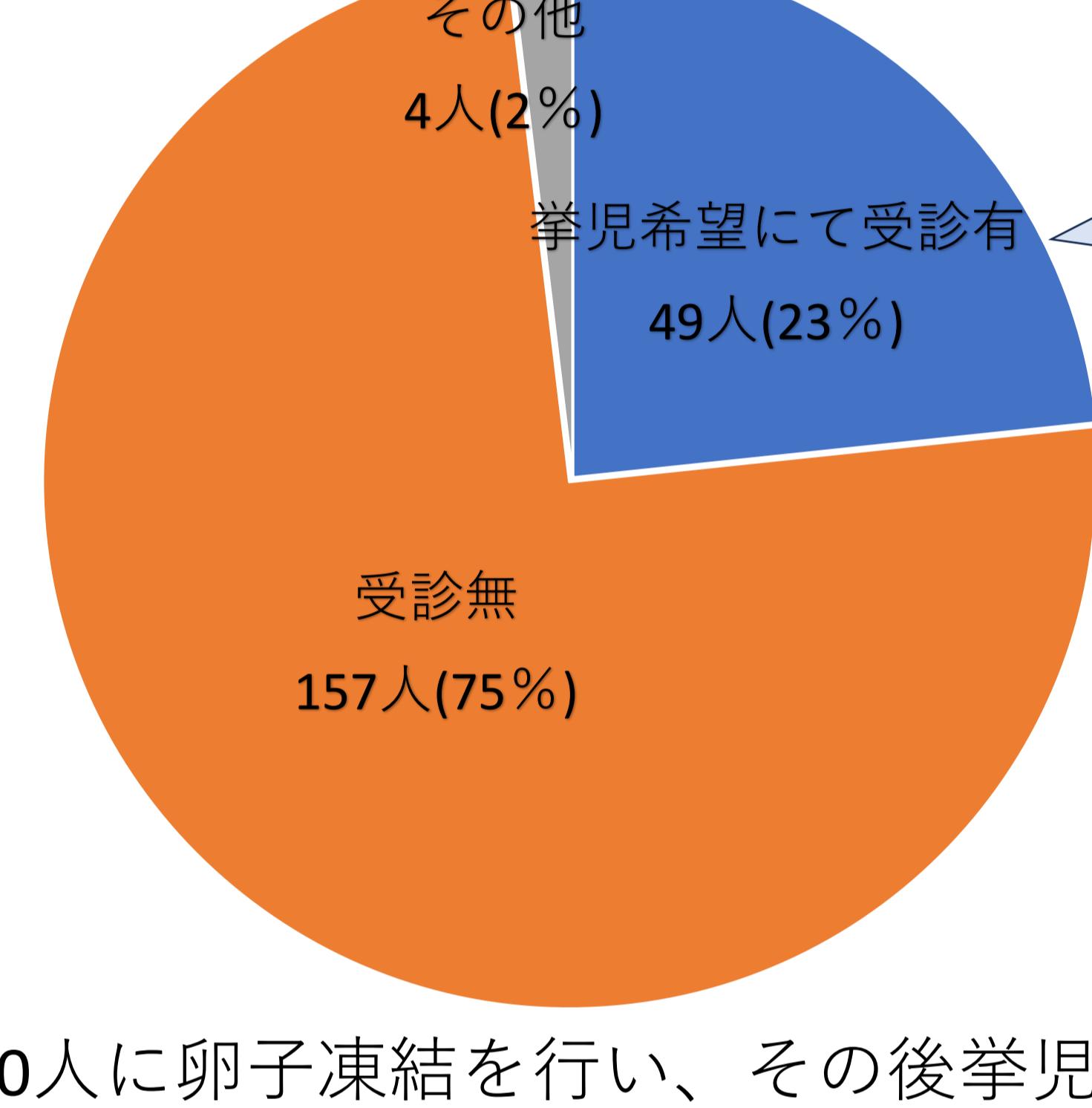
【対象と検討項目】

- 社会的卵子凍結を行った210人(268周期) 凍結時平均年齢：36.5歳 平均凍結個数：8.6個
→卵子凍結後の治療内容・妊娠の有無について調べた。
- 卵子融解を行った32人(46周期) 融解時平均年齢：41.3歳 平均融解個数：6.3個 平均凍結期間：1081日
→2群間での培養成績・移植成績について比較検討した。

	卵子融解全体 (32人)	卵子凍結時年齢 36歳未満 A群(11人)	卵子凍結時年齢 36歳以上 B群(21人)
平均AMH値	1.89	3.69	1.12
平均卵子凍結個数	7.3個	9.6個	6.0個
平均卵子融解個数	6.3個	8.5個	5.2個

A群で平均AMH値が高く、より多くの卵子を凍結していた。

結果



そのうち凍結卵子を融解したのは32人(保険でARTと併用を含む)で、卵子凍結後に受診した人の65%が卵子融解を行った。

20%(10人)が卵子融解で、18%(9人)が保険で採卵・ARTで、6%(3人)が自然(タイミング)で妊娠した。

卵子融解の移植成績

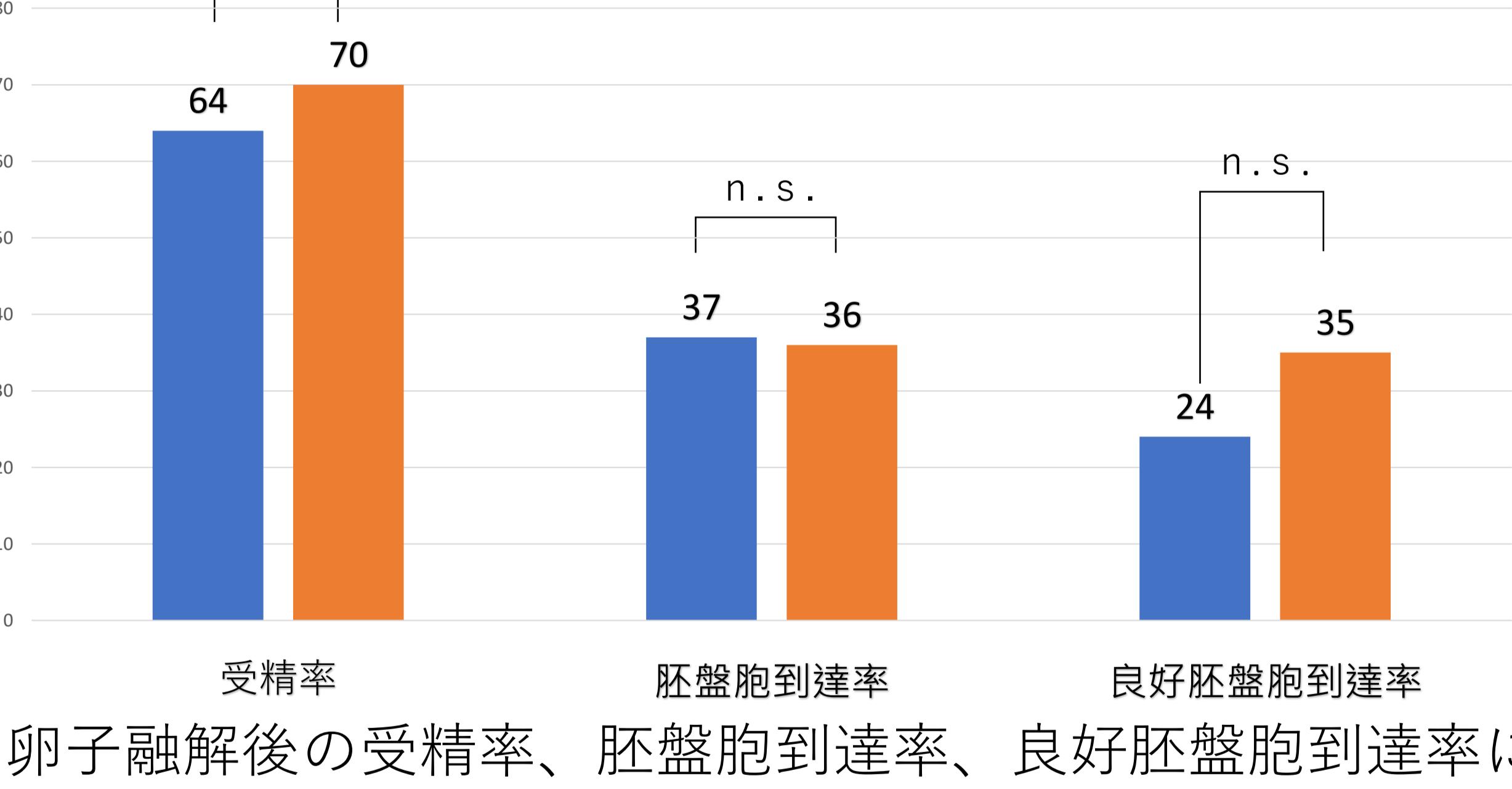
	A群(11人)	B群(21人)
平均移植個数 (移植個数/人数)	1.3個/人	0.9個/人
臨床妊娠率	36%(4/11)	29%(6/21)
生産率	36%(4/11)	19%(4/21)
流産率 (流産/臨床妊娠)	0%(0/4)	33%(2/6)

210人に卵子凍結を行い、その後挙児希望にて受診があったのは49人(23%)であった。

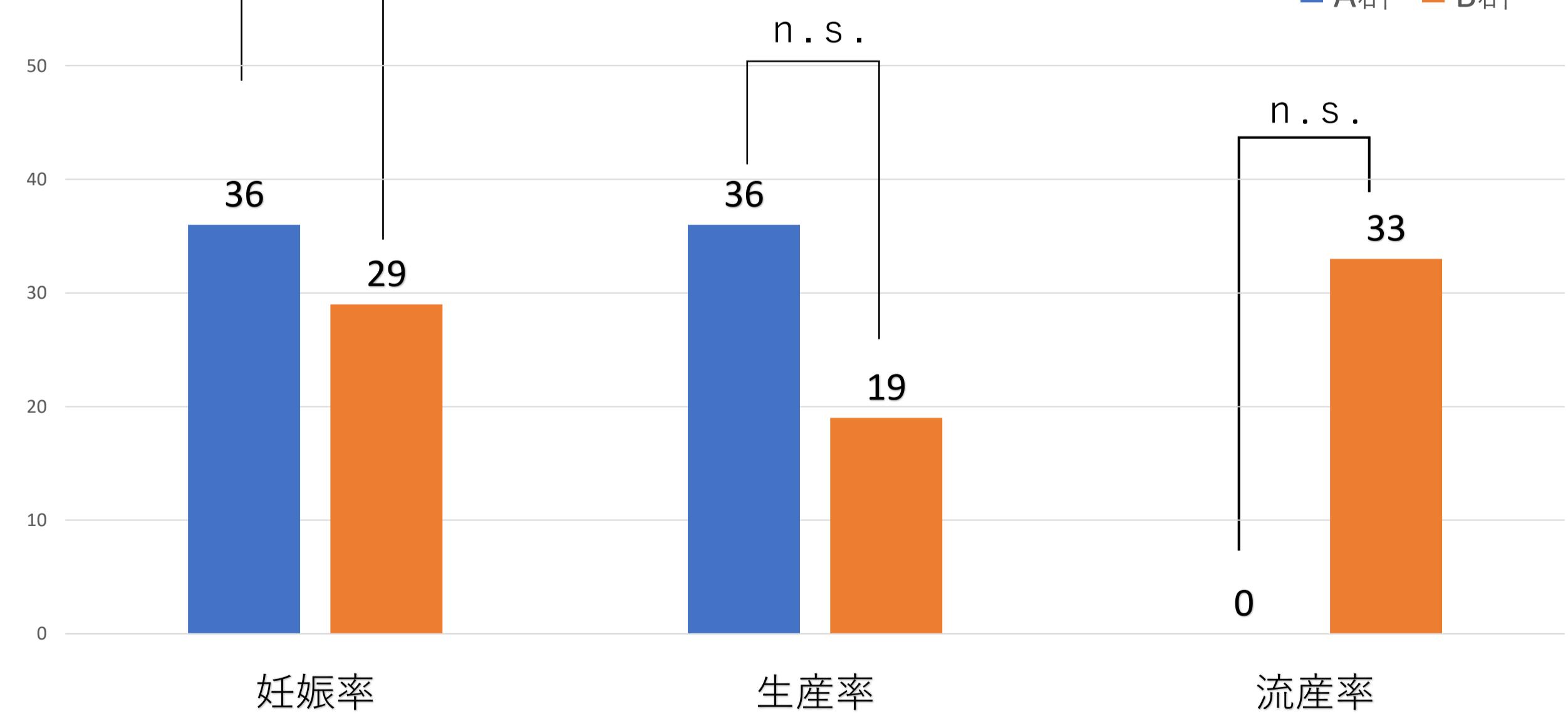
その他1人は廃棄、3人は他院へ移送を行った。

卵子融解の培養成績

	A群(11人)	B群(21人)
受精率	64%(58/91)	70%(75/107)
胚盤胞到達率	37%(34/91)	36%(39/107)
良好胚盤胞到達率	24%(22/91)	35%(37/107)



卵子融解後の受精率、胚盤胞到達率、良好胚盤胞到達率に有意差は認められなかった。



臨床妊娠率、生産率、流産率にも有意差は認められなかったが、妊娠率・生産率はA群で比較的高い傾向にあり、B群では流産例も認められた。

考察

- 卵子融解の成績を比較すると、卵子凍結時年齢が36歳未満の群で妊娠率・生産率が高い傾向にあった。卵子凍結は早いうちから行うことで、質の高い卵子を多く得られ将来の生産率が上がると考えられる。
- 卵子凍結をしても、挙児希望時にTIや保険で再度採卵・ARTから治療を始める例もみられた。これは、2022年にARTが保険適用になったことが影響していると考えられる。また、受診していない人の中にも、凍結卵子を使用せずに自然妊娠に至ったケースが含まれていると考えられる。
- 卵子凍結を行った約8割の人が凍結保管継続中で、保管期限や保管場所の確保が今後の課題となる。

第69回 日本生殖医学会 学術講演会
利益相反状態の開示
筆頭演者氏名：水野綾子
所属：医療法人社団桐杏会
メディカルパークみとみらい

今回の演題に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。